

西欧における ガーベラ生産の現状

東京都農業試験場

浜 田 豊

1. はじめに

オイルショック以来、切花でも鉢花でも低温開花性の強い作目、品種の需要が増大したことは、洋の東西を問わない。とくにガーベラでは、永年の品種改良の結果、現在の豪華な大輪系ガーベラが育成され、増殖技術(組織培養、挿し芽繁殖技術など)の確立により大量供給が可能になったことが需要の拡大に拍車をかけたのである。

2. オランダに於ける苗生産

現在、我国にも年間100万本前後(1982年)の苗が輸入され、毎年新しい品種が導入されている。これは、オランダの苗専門業者により、全世界を対象に輸出されているためであり、我国独特の品種が皆無に等しいためでもある。オランダにはこのように苗生産を専門とする5~6社があり、年間約1,500万~1,800万本の苗を生産している。その中の大手はブリースマン社とフロリスト社である。この両社でオランダの苗生産の60~70%を占めている。

3. メリクロン苗の供給

近年、園芸作物の組織培養技術の発達により、無病のメリクロン苗の供給が急増している。昨今のバイオテクノロジーブームに乗って我国の種苗業者もメリクロン苗の供給をキャッチフレーズにしているほどである。

オランダでは、多くの花き園芸作物で組織培養が行なわれ、1980年には743万本のメリクロン苗が供給されたが1981年には1,011万本、1982年には1,646万本と毎年前年比73.5%、61.4%の伸びを示している。

1982年の主な作物はネフロレプス(ツデー類)511万本、セントポーリア498万本、次いでガーベラの216万本、シンビジウムの105万本などとなっている。ガーベラでは1980年58万本1981年185万本、1982年216万本と着実に伸びている。

4. オランダにおけるガーベラ生産

オランダにおける1983年のガーベラの切花生産は、2億6,900万本あり、総生産額は1億3,800万ギルダー(103億5千万円)であった。したがって平均単価は51.3セント(38.5円)ほどである。この生産額はバラ、キク、スプレーカーネーション、チューリップに次いで第5位の重要な作目となっている(表1)。

ガーベラの栽培面積は1980年229ha、1982年260ha、

1983年256haとほぼ横ばいの状況(表2)であるが、農家数は291戸で平均0.88haの温室経営を行なっている。規模別では1ha以下が137戸、1ha以上が154戸の構成である。

表1 オランダにおける主要切花の取引高(1983)
総取引高(単位100万ギルダー)

1. バラ	452
2. キク	299
3. スプレーカーネーション	169
4. チューリップ	155
5. ガーベラ	138
6. フリージア	135
7. ユリ	112
8. スタンダードカーネーション	64
9. シンビジウム	54
10. カスミソウ	57
11. アイリス	46
12. アルストロメリア	28
13. スイセン	27
14. グラジオラス	25
15. アンズリウム	23
16. アマリリス	16
17. ライラック	15
18. アスパラガス	9
19. ユーフォルビアフルテンス	9
20. ネリネ	9

表2 オランダにおける作物別温室面積(ha)

	1980年	1982年	1983年
トマト	2107ha	2249ha	2107ha
バラ	736	756	730
スプレー・カーネーション	328	316	292
スタンダード・カーネーション	138	131	125
キク	490	469	469
フリージア	366	346	328
ガーベラ	229	260	256
ユリ	139	128	133
鉢物および花壇苗	553	614	646

5. 西ドイツ、イタリア、フランスの現状

西ドイツはヨーロッパ最大の園芸消費国である。現在切花の消費量の50%はオランダやイスラエルから輸入されている(統計および為替レートにより若干の差があるが7,600~11,000円/国民1人当り)。

西ドイツの花き市場取扱い額は1978年において17億マルク(1,376億円)、市場外流通を含めると切花と鉢物で約25億マルク(2,025億円)の生産が行なわれている。ガーベラ栽培面積はキク、バラ、カーネーションに次いで第4位の62haを占めている。主な生産地帯はオランダ国境に近いムンスター市近郊とドイツ南部のミュンヘン郊外である。

植付品種は、オランダからの苗の供給が充分あるので次第に独特の品種からオランダ系品種に入れ替わっている。

イタリアでは、地中海性の温暖な気候を利用してカーネーションの生産が盛んであったが、1971年をピークに1976年には3,000haの作付があったカーネーションに入れ替わってガーベラの作付が増えている。面積的には1973年45.4haだったものが、1976年には68.2haに増加し、4,600万本の切花が生産されている。さらに1982年には新たに150万本(推定23ha)が植え付けられ、20~30%が輸出に回わされている。ガーベラの生産地帯はほぼカーネーションの生産地と重複し、消エネルギー作物ということもあって急速に増加している。

品種は、イタリア、フランスで育種された品種に替わってオランダ系の豪華な品種が植付けられています。リビエラを中心とする農家1戸当りの生産規模は40~70aとまだオランダ、ドイツに比べると小さいが、気候が温暖なため生産コストが低く、将来、オランダの強力な競争相手になること必至と思われる。

フランスでは14,000戸の農家が6,000haの面積で花き園芸を行なっているが、ガラス温室は28%の1,670haにすぎない。主な花き作物は1979年でキク(580ha)、バラ(500ha)、グラジオラス(430ha)、カーネーション(290ha)、チューリップ(210ha)であり、ガーベラは統計上に現われていない。主要な園芸生産地帯は、地中海沿岸のコートダジュール、ブルターニュ地方、プロバンス地方、パリ郊外であるが、リゾート地帯のコートダジュールのフレジュス(Frajus)近郊では着実に増加している。

6. オランダにおけるガーベラの生産と育種

近年ガーベラの育種や生産技術はオランダを中心に改良が進み、西欧諸国ではほぼオランダ方式でオランダ系の品種の栽培が行なわれている。そしてその多くが苗生産業者を通して普及している感がある。

(1) 育種目標

現在、研究機関や種苗業者で行なわれている育種は①あかるい花色、例えば蛍光灯下でも黒ずまず映える色を持つ、②切花として利用するため丈夫で少くとも40cm以上の切花の長さを持つこと。③葉は小型で開口性(立ち葉でない)が強く、少ないもの。④花もちが良く、少くとも2週間以上もつもの。⑤エネルギー節約のため低温開花性が強いことなどを中心に育種が進められている。

花色としては赤系、ピンク系を中心にオレンジ、白、黄色の彩やかな明かるいものを選抜している。また最近では、より豪華な花型として半八重、八重の比率が高くなっている(一重75~80%、八重17.5~20%、黒目タイプ2.5~5%、……プリースマン社による)。

(2) 主要な品種と花もち

最近の切花の品質の指標の1つとして花もち(Vasc Life)が大きな問題となっている。新品種の育成の段階

でも花もちの悪いものはまず最初に捨てられる。オランダで花もちの良いものとして定評のある品種としては、アップルブロッサム(ピンク一重)、マルレーン(黄色八重)、フルール(ピンク一重)などがあげられる。そしてさらにステムの強さ、単位面積当りの採花本数等が加味され、ほぼ10品種で全体の栽培面積の80%を占めている。それらの品種は表3に示すとおりである。しかし最近、次々と新しい品種が発表され、クラウディア(ライラック一重)、マリア(白。八重)、ジャネット(ピンク八重)など新しい花色と特殊な花型の品種が増加している。

表3 オランダにおけるガーベラの
主要な栽培品種(1982年)

品 種 名	花色および花型	切花長 cm	採花本数/m ²		花持ち日数 日
			本	H	
1. クレメンティン	オレンジ・一重	70-80	130	140-150	14~16
2. アップルブロッサム	ピンク・一重	50-60	140-150	140	14~16
3. フルール	ピンク・一重	50-60	140	100	14~16
4. マルレーン	黄色・八重	60-70	100	90-100	14~16
5. デルファイ	白色・一重	60	90-100	60	10~14
6. ベロニカ	オレンジ・レッド・一重	60	90-100	40-50	10~14
7. ベアトリックス	ピンク・半八重	40-50	90	70-80	14~16
8. テラミックス	ピンクと赤の複色・一重	40-50	70-80	125	10~14
9. ピンパーネル	赤・一重	50-60	125	60	14~16
10. ヘリオス	赤・一重	60	90		10~14

(3) 一般的作型

オランダを中心とする作型は株間を25~35cmとして条間を30cmとし、7月に植えつけ、8月末か9月初めから採花始める冬期加温型の作型がある。この作型だと10月に第1のピークがあり、2月に第2のピークがある。全栽培期間は1カ年であり、採花期間は10カ月と短い。これに対して、日照量の少ない冬期は2~5℃に保ち、株を維持し、3月から加温を開始する冬期一時休眠型の栽培も行なわれている。

(4) ソイルヒーティング

ガーベラの場合、地温を上げることによって、株の生育ならびに初年度に於ける採花本数ならびに品質の向上が認められるため、オランダ、ドイツだけでなく、イタリアにいたるまで、地中暖房が普及している。この地中暖房によって、冬期の暖房費の節約につながるだけでなく(温室内の気温を下げられるため)、春先の切花本数の増加も期待できる。

配管は硬質のビニル管を地下部50~60cmに埋設し40℃の温湯を通すことによって行なわれる。

最近では地中暖房とともに株間だけを加温するマイクロクライミット・ヒーティングも実用化し、エネルギーの節約に役立っている。(以下次号に続く)